

2011年度 政治経済学

小倉利丸

ogura@eco.u-toyama.ac.jp *

2012年1月5日

11 社会進歩の矛盾。機械化される中心と低開発の周辺

11.1 概観

前回、資本主義的な機械化を社会の進歩とみなす常識にひそむ問題点を指摘した。現在にいたるまで、一国の経済の進歩や発展を測る尺度として、機械化（つまり省力化）による効率性が不可欠の要因としての位置を占めている。前回指摘したように、機械化による効率化や省力化は労働の主体である人間にとっての豊かさや幸福、あるいは自由な時間の獲得を意味するとはいえないことなどその問題点を指摘した。

経済は、一国の内部で完結せず、貿易や国境を越えた投資、国境を越えた人々の移動（仕事を求めての移民）など、グローバルなネットワークのなかにある。主として資本主義の先進国とみなされている地域の中核にある経済では高度な技術を駆使した先端的な産業が位置するが、その周辺には中小零細な仕事場が多数存在する。この中心と周辺の関係は、先進国内部においてもみられるし、先進国と途上国、途上国の工業中心部とその周辺部にもみられる重層的な構造をもっている。さらに、工業と農業、製造業とサービス業など、産業の間にも見出すことができる。こうした中心と周辺の間にある機械化をめぐる「格差」の問題は、労働者の雇用形態や貧困、ライフスタイル、家族関係など多方面にわたる問題を提起するばかりでなく、社会の進歩や発展をなにを基準にして評価すべきなのか、という問題、とりわけ、先進国は途上国の将来のモデルとなるべきなのかどうか、という大きな問題にも関わる。これらの問題と工業化＝機械化との関わりを論じる。

11.2 機械化と＜労働力＞としての人間

機械は辛い労働から人間を解放する可能性を秘めているという物語は、遠く古代の頃から人間が抱いたある種の「夢」でもあった。古代ギリシアに機械と呼べるものは実在しなかったが、辛い労働が人間を苛め、人間関係に苦痛を伴う労働にもっぱら従事する人々（奴隷）とこうした労働を他者＝奴隷に委ねてその富を享受することができる人々（奴隷主あるいは支配者）を生み出すことはよく知られている。言い換えれば、こうした苦痛としての労働からの人間の解放は、同時に、人間関係における支配と服従の関係を転換する可能性を秘めているのではないか、という認識と願望があった。

たとえばアリストテレスは次のような「夢」を語っていた。

* 携帯 070-5553-5495

ダイダロス^{*1}の芸術作品が自分から動いたように、あるいはヘファイストス^{*2}の五徳がみずから聖なる仕事に赴いたように、すべての道具が命令によって、あるいは予感によって、自分のなすべき仕事をこなすことがあるうならば、すなわち織機の杼（ひ）がみずから織るならば、親方は助手を必要とせず、主人には奴隷も必要なくなることだろう。

またキケロの時代のギリシアの詩人、アンティパトロスは、次のような詩を書いている。

粉挽く娘よ。挽く手を休めて、安らかに眠れ！雄鶏がおまへたちに朝を告げても無駄なように！神は乙女の仕事を水の精たちに命じた。水の精たちは軽々と車の上に飛び乗る。揺さぶられた軸は、その輻（や）とともに回り、重石も円を描いて回転する。われらも祖父母のように暮らそう。働くのをやめて女神がわれらに贈ってくれた贈り物を楽しもう。^{*3}

この詩で水の精は、娘に代わって水車を回し、娘は労働から解放されてゆったりとした時間を過ごす。これは重労働からの解放を夢見る当時の人々の願望の表現であろう。アンティマルクスは、またパトロスは「穀物を挽くための水車の発明、すなわちこのあらゆる生産機械の原初形態ともいべき発明を、女奴隷の解放者であり、黄金時代の建設者であると讃えた」^{*4}ことも紹介している。

紀元前の古代に遡らずとも、機械として後の時代に実現されることがらを神的な能力をもつ超越的な存在に託す物語に事欠かない。洋の東西を問わず、労苦からの解放の夢を機械的なものにみようとした。しかし、こうした夢は近代に入って、急速な科学技術の発達（宗教的神話の世界から世俗社会の自立）によって実現の方向に向かったようにみえるが、しかし、近代の技術進歩を促した資本の動機は、労働を軽減することにはなかった。資本は、より高い生産性をより大量の商品の生産と販売に結びつけることと、熟練労働の解体を意図したものだ。

機械化の動機は、前回も指摘したように、＜労働力＞の限界を突破することによって生産力の増加を人間の心身の能力の限界によって制約されない条件を獲得することにあつた。＜労働力＞を機械と比較すると次のような対照的な性格をもっていることがわかる。

- 時間の効率性。スピードアップによって、時間あたりの生産量を増加させることは、資本の生産力の基本的な条件である。すべてを手作業に頼る場合には、この時間の効率性は人間の能力に依存する。しかし、機械化によって、道具に替えて作業機が導入されれば、人間の心身の能力に依存しないスピードアップが達成できる。19世紀の産業革命では、紡績や織布などの繊維産業の機械化によって、20世紀の情報化では、事務の計算処理を手作業（そろばん）からコンピュータ処理に委ねることによって、大幅なスピードアップが実現した。
- 結果の確定性。人間は心身の状態によって作業能率にムラがあり（このことを示すために、私は労働力と＜労働力＞を区別する）予測通りに行動するとは限らない。機械はこうした心的な不安定性がない。計画どおりに機械が作動すれば計画どおりに生産物が生産される。生産過程における将来に向けた計画が立つということは、投資のロスを最小化することができる。時間の効率性ととともに、技術の方向は結果を確定しうるような生産工程の技術が次々に導入された。20世紀初めに導入されたベルトコンベアシステムは現在にいたるまで製造業の基本的な生産システムだが、これは、人間の不安定性を徹底して

*1 ギリシア神話に登場する職人

*2 火と鍛冶の神

*3 前掲、『資本論』より引用

*4 マルクス『資本論』第1巻第13章「機械類と大工業より再引用

機械のリズムに合わせるシステムであるといえる。

- 抵抗の排除。熟練労働者は、かつて独立した生産者であった時代であれば作業の全体を自己の管理下において労働を自己の裁量で行っていた。手工業的な技術にもとづく工業のばあいは、容易にこうした熟練労働者を資本の自由に扱うことはできないので、労働時間の延長や作業工程の資本による管理は難しかった。しかし、機械の導入は時間の効率性や結果の確定性だけでなく、熟練労働者の抵抗を排除し、生産工程を資本の管理下におくことになる。

11.2.1 手工業的労働から機械化された労働へ

機械化されていない労働の現場では、労働者の労働が全体の工程の主要な条件となる。しかし機械化されると労働者の裁量は大きく制約される。

マニユファクチュアにおいては、労働者が単独、あるいはグループで、自分の手工道具を用いてそれぞれ特殊な部分過程を遂行しなければならない。たしかに労働者はその過程に取り込まれるが、しかしその過程もまた労働者にあらかじめ合わせて作られている。分業のこの主観的な原理が機械生産の導入にともなって消滅する。機械生産においては、全過程が客観的に、すなわちそれ自体として観察され、全体を構成する諸段階に分けて分析される。そして各部分過程を遂行し、さまざまな部分過程を結合するという課題は、機械工学、化学その他の技術的応用によって解決される。(略)あらゆる部分機械は、後続の部分機械に原料を供給し、そかそそれらはすべて同時に作動する。

ひとたびシステムが、みずから動く一台の原動機によって運転されるようになると、それはそれ自身として完結する巨大な単一のオートマチック装置となる。今では全システムをたとえば蒸気機関によって運転することもできる。(略)人手がたんなる補助要因としてしか必要なくなったとき、細部における改良の余地はたえずあるにせよ、機械類のオートマチック・システムが完成したといえる。

マルクスはこうした機械化された工場を「一匹の機械怪獣」になぞらえて、次のように SF 映画のような雰囲気でも描写している。

さらに各作業機からなる組織化されたシステムが、ただひとつの中央自動発動装置から動力伝達機構を介して運動を受けとるようになると、機械経営も最高度に発達した形態となる。そこでは個々の機械に代わって、一匹の機械怪獣が出現し、その巨大な体躯は全工場を埋め尽くす。その悪魔的な力は最初のうちこそ巨大な手足のほとんど荘重ともいえるゆったりとした動きの背後に隠されているが、やがてそれがほとぼり出るや、無数の本来の作業器官がまるで熱病に浮かされたように激しく踊り狂うのである。

冒頭に掲げたアンティパトロスの牧歌的な自動機械のイメージと比べてみればわかるように、巨大な工場を動かすのはもはや「水の精」などではなく「怪獣」なのであった。製造業とは作業場で職人が道具を用いて労働する場所であるという伝統的な観念からすれば、産業革命がもたらした巨大な機械化工場は人を圧倒するだけの迫力があつたにちがいない。しかも、この工場で働くことが労働者にとって朝ゆっくりと眠る時間を与えるどころかむしろ 24 時間昼夜を分かたず労働に駆り立てられる場所となるのだから尚更であろう。

大工業は、労働者の個人的な身体的能力に依存しているかぎり十分な発達をとげることはできない。熟練労働者に依存する工業のばあいは、その拡大の制約になるのが熟練労働者の確保である。熟練の獲得に多くの時間と訓練が必要であればあるほど、生産の拡大は臨機応変に展開することはできない。需要が拡大し生産の大規

模化が進につれて熟練の確保の困難が資本にとって大きな障害と感じられるようになる。

一定の発展段階に達すると、大工業は技術的にも手工業的な基盤、あるいはマニファクチュア的基盤と衝突するようになる。動力機、動力伝達機、道具機が大型化する。また道具機が、もとはそれを作るさいの規準となっていた手工業的なモデルを離れて、機械としての役割によってだけ規定される自由な形をとるようになる。それにつれて機械の部品が複雑化し、多様化し、規則性を増し、オートマチック・システムが形成され、加工の難しい材料、たとえば木に代わって鉄を使用することがますます避けられなくなっていく。—こうしたいずれも自然発生的に生じる課題を解決しようとする、いたるところで人的な障害に突き当たった。

ここでのポイントは「人的な障害」である。次の箇所でも機械と労働者の対比が指摘されている。

機械類が導入されると、まずは労働手段の運動と作用が、労働者に対して自立性を獲得していく。労働手段はそれ自身、一個の産業上の永久運動機関と化し、助手として働く人間の自然的限界、すなわち肉体の弱さや我意といったものと衝突しないかぎり、途切れることなく、生産を続けるであろう。したがって資本としての機械—そしてまさに資本として存在するときに自動機械は、資本家という姿をとって意識と意志をもつのである—は、抵抗はしても弾力性をそなえている人間の自然的限界を、なんとか最小限の抵抗に封じ込めようとする衝動に燃えている。そうでなくてもこの抵抗は、機械労働が一見楽に見えることと、より柔軟性に富む女性・児童労働が導入されたことによって、よわめられているのである。

労働者は「肉体の弱さや我意といったもの」をもち、機械と衝突する潜在的可能性をもつものだと指摘されている。機械はこうした労働者の人間としての抵抗を最小限に「封じ込める」ものでもある。

労資関係（階級関係）は、社会の経済が構造的に各々の人間に割り振る社会的役割行動の利害対立に基づく。これは極めて人間的な対立であるが、経済のメカニズムでは、それが資本と＜労働力＞という構造のなかに組み込まれることになる。労働者は機械の補助として単純労働化されることに抵抗し、人間らしい労働を要求する。しかし、人間の人間たるゆえんでもある「人間らしさ」が資本にとっては限界となる。感情をもち、休息を必要とし、命令に服従するとは限らない厄介な動物としての人間が機械の勤勉さと従順さと常に比較されるようになる。そして、機械が優位にたつ局面から次々に労働者が排除され機械に置き換えられる。

マルクスは大工業の特徴として、「生産手段である機械そのものを占有し、機械によって機械を製造せざるをえなくなった」点に求め、「こうしてはじめて大工業は自分に適した技術基盤を創出し、自分自身の足で立つにいたった。」と述べている。これは、労働者という資本にとっては利害を異にする他者に依存することなく生産過程を支配できる理想的な状態を意味している。労働者を一人も必要としない完全な自動機械はありえない想定であるが、こうした自動機械がもしあるとすれば、それは資本にとってはあたかも人手を加えていない自然の土地がその土地の所有者になんらかの自然の産物（鉱物であれ植物や動物であれ）を与えるようなそんな存在に近いものになるといえるかもしれない。^{*5}

機械化と単純労働化は、＜労働力＞の価値を引き下げる。労働時間の延長と賃金そのものの引き下げが可能になる結果だ。そして、生産性の上昇は、単位あたりの労働が産出する生産物の量を増加させる。もし、需要

^{*5} こうした自動機械は労働者の剰余労働に依存せずに剰余価値を生み出す特異なメカニズムを獲得することになる。いっさいの階級的な利害対立の相手を排除してなおかつ剰余価値を取得できるのは、資本にとっての理想郷である。膨大な失業人口がもたらす社会的摩擦と不安定は資本のコストではなく国家の政治的なコストとなることは避けられないから、こうした理想郷は現実には不可能であることはいうまでもないが。

が一定であれば、より短い労働時間によって需要を満たすことが可能となり、結果的には、労働時間の短縮に寄与するものだ。しかし、資本の機械化の動機は、労働時間の短縮を極力回避し（労働時間の維持や延長をむしろ好む）、より多くの生産物の生産のために機械化と技術革新に投資する。こうした生産量の拡大を支えているのは市場の外延的あるいは内包的拡大^{*6}である。

さらに生産性の高い機械の導入を他の資本にさきがけて達成した資本には通常の剰余価値に加えて特別剰余価値の取得が可能になる。この特別剰余価値が、資本相互の技術開発競争を促すことになるが、同時に、このような先端的な技術が他の資本にも普及するまえにより多くの特別剰余価値を取得しようとするれば、最先端の機械をフル稼働させようとするだろう。こうした資本の行動は、最先端の現場が同時に長時間労働の現場にもなり、労働者の労働条件は必ずしも緩和されることにはつながらない。

こうした手工業から機械化への移行は、先進国の歴史的過去に属するが、同時に現代の途上国の現実のなかにも、また先進国のなかの中小零細産業のなかにも見出される今現在の現実でもあり、手工業と機械化は、歴史的な前後関係としてだけ理解してはならず、今現在における地理的空間的な併存状態でもあることを抑えておくことが大切である。

機械化された部門と手工業に依存する部門は、現代では、物の生産の現場だけでなく、物の生産と生産された物を商品として流通・販売する部門との間にも見出される。中小零細の店舗が存在する一方で、大手の量販店やスーパーは販売のある種の機械化としてとらえることができる。またファーストフードの厨房と伝統的な食堂の調理場とを比べてみても、前者が機械化といつていいようなマニュアル化された労働と調理機械の導入、後者が家庭の台所にも共通するような道具を中心にした調理という対照的なありかただが、これらが併存しながら、徐々に機械化へと向かう。しかし、ファーストフードの厨房の労働は決して軽減されることはなくむしろ秒単位の労務管理が貫徹することになる。

このように機械化と機械化されない手工業の生産とは、歴史的な前後関係と同時に地理的併存関係としても存在する。いいかえれば、ある一定の条件のなかで機械化が進展する。

- 熟練を必要とする分野では大規模な機械化が進みにくい。
- <労働力>の価値が相対的に低い地域には労働集約的な生産過程が立地し、逆の場合には機械化や技術革新へのインセンティブが高まる。
- <労働力>の使用に法的制度的な規制が厳しいところでは、機械の導入が促される。
- 労働者の抵抗が大ききところでは、この抵抗を抑圧できた場合には機械の導入が進む。
- 失業率が高く過剰人口が潤沢に存在するところでは、機械化は進まない可能性があり、人口が希少なところでは、機械化へのインセンティブが高まる。

これらの要因は市場経済の競争メカニズムで決まる側面よりもむしろ労資関係の闘争や交渉、政治過程における法的制度的な枠組みがどのようになっているかで大きく左右される。

11.2.2 機械に従属する労働

マルクスは機械化がもたらす新たな状況をつぎのように述べている。

このように機械の資本主義的使用は、一方では労働日を際限なく延長するための新しい強力な動機を

^{*6} 「外延的」拡大とは地理的な市場の拡大を意味する。これまで販売の対象とされていなかった地域への販売の拡大などがこれにあたる。「内包的」拡大とは、同一の地理的な市場内部の需要の拡大である。販売する商品価格を引き下げたり、広告戦略を通じて、新たな購買層を掘り起こすことなどがこれにあたる。

作り出す。そしてまた、この傾向に対する抵抗を排除するような仕方、労働様式そのものと社会的労働体の性格を変革する。他方、機械の使用は、一部はそれまで資本の手が届かなかった労働者階級の層を雇用することによって、また一部は機械によって駆逐された労働者を遊離させることによって、資本の法則に服さざるをえない過剰労働者人口を産出する。ここから、機械が労働日のあらゆる道徳的、自然的制約を撤廃するという近代産業史上の特異な現象が生じ、また、かの経済的パラドックスが生じた。すなわち労働時間を短縮するためのもっとも強力な手段であったはずのものが、労働者とその家族の全生活時間を、資本の価値増殖に利用できる労働時間に変えてしまうためのもっとも確実な手段としたのである。

上で指摘されたことの論点を列挙すると

- 労働日の際限のない延長。
- 労働日の延長への抵抗。労働者の抵抗と社会的な立法（労働時間の規制など）
- 資本の手が届かなかった労働者階級の雇用。熟練労働者だけでなく、単純労働者や子どもの雇用。
- 機械化による労働者の「駆逐」 合理化によって労働者を機械に代替すること。
- 労働者の排除による「過剰労働者人口を産出」

産業革命は、輝かしい技術進歩の副作用として、多くの深刻な社会問題を引き起こした。技術進歩が資本の利害によって支配された結果として、長年の人類の夢でもあった労苦からの解放の技術的な条件が実際には適用されるケースは極めて限定的なものに留まった。

産業革命のきっかけとなる機械は、一つ一つの道具を扱う労働者に代えて、同様ないし同種の道具を大量かつ同時に使用し、形態はどうあれ単一の動力によって動くメカニズムを利用する。ここにわれわれが機械と呼ぶものが成立する。(略)

作業機の規模が大きくなり、同時に作業する道具の数が増えると、より大規模な運動メカニズムが必要となる。もともと人間は均等かつ継続的な運動をおこなう生産用具としてはきわめて不完全なものであるが、それを別としても、こうした大規模なメカニズムは自分自身の内部抵抗にうち勝つためにも人間動力にまさる強力な動力を必要とする。

馬や水力（水車）、風力（風車）などの自然力が歴史的時代を超えて人類史で長年用いられてきた動力源だった。産業革命によって導入された蒸気機関以降、近代化、工業化は、動力技術の高度化をこの2世紀の間に急速に進展させた。人間や動物のような自然の力、あるいは、地理的に制約される自然エネルギーの利用という地理的な制約条件を蒸気機関は解除した。その結果として、都市が変容するようになる。近代以前の都市は、一般に商業の場（人々が商品売買を行うための交渉の空間）であり、小規模の作業場が独立して存在する場、あるいは政治的宗教的な場であったが、これに加えて生産を担う〈労働力〉を集中させる工業都市が生み出された。

労働者を都市の労働市場で大量に調達し、工場に動員する構造を支える技術的条件が、大規模の工場を維持することが可能な動力の供給だった。それが産業革命の蒸気機関だった。こうして、近代社会は、都市と農村の間に構造的な差異を生み出した。農村はもっぱら農産物（羊毛や綿花のように工業原料となる農産物を含む）の都市への供給を、都市はもっぱら工業製品の生産を担うという社会的な分業構造が可能になった。

11.2.3 都市と農村の社会的分業

蒸気機関以降、動力機の発展は、自然力に依存したとしてもそれを都市に集中する工場や人口を支えることができるような動力のシステムを前提とするようになる。この点で電力は都市と農村の分離と分断を構造化する重要な特徴をもたらすことになる。

(蒸気機関の)能力は完全に人間の統制下におかれ、可動的で、かつそれ自身が移動の手段となり、水車のように田舎風ではなく都市で利用できる。水車の場合のように生産拠点を国中に分散させることなく都市に集中させることができ、技術的応用においては汎用性があり、立地に関してはローカルな条件に比較的制約されない。

ここでいう生産拠点とは工業生産の拠点を意味する。伝統的な社会では、工業もまた農村に散在することも珍しくなかったが、近代社会にはいって、農村はもっぱら農業に特化するようになる。しかも、こうした工業と農業、都市と農村の社会的分業は国境を超えた構造になり、同時に、この広範囲にわたる空間的な分業の広がりを媒介する交通と通信を発達させることになる。

工業と農業の生産様式における革命は、とくに社会的生産過程の一般条件である通信および運輸交通手段における革命をも必要とした。副業的な家内工業をともなう小規模農業と都市手工業が、フーリエの表現を使えば、それまでの社会の軸をなしていた。こうした社会の通信および運輸交通手段は、社会的分業の拡大、労働手段と労働者の集中、植民地市場などを必要とするマニユファクチュア時代の生産上の要求にはまったく応えることができなくなり、事実、大変革をこうむった。これと同じように、マニユファクチュア時代から受けつがれた通信および運輸交通手段も、大工業にとってはやがて耐えがたい桎梏となった。大工業には、熱に浮かされたような生産速度、新たに創出された世界市場との関連などがつきものである。大変革をこうむった帆船建造はいうにおよばず、河川汽船、鉄道、海洋汽船、電信システムなどのよって通信および運輸交通機関はしだいに大工業の生産様式に適合させられた。

都市と農村の分業は、国内だけでなく近代資本主義の世界市場の構造の基本をなす。農村、あるいは農業部門は人間の生存の基盤となる食料生産の現場であるにもかかわらず、資本主義では周辺的な産業とみなされ、農村は都市の工業労働力を供給するだけの場所とみなされ、都市部に貨幣的富が集積されるようになる。農村部での安価な衣食住の基本的物資の生産は生活費を引き下げ賃金水準の引き下げ = <労働力> 価値の引き下げを意味する。

11.2.4 機械化 = オートメーション化と労働市場の流動化、不安定化

機械化にともない、労働者の労働は、自立した熟練を要する能力を必要としなくなり、単純労働として機械を補助し機械のペースに支配されるようになる。その結果として、長時間労働、子どもの労働が蔓延することになることは以前にも指摘したとおりであるが、さらに、こうした単純労働は、容易に取り替えがきく<労働力> となることによって、労働市場の流動化が急速に進む。

大工業の原理は、各生産過程を、それ自体として、そしてとりあえずは人間の手をまったく考慮することなく、その構成要素に分解する。この原理こそが、テクノロジーという完全に近代的な科学を創造したのである。(略)人間の身体によるあらゆる生産行為は、どんなに多様な道具が使われていようと、必ずや数少ない大きな基本的運動形態のなかで行われる。テクノロジーは、この基本的運動形態を

発見したのである。(略)近代工業は生産の技術的基盤を変革すると同時に、労働者の機能や労働過程の社会的結合をたえず変革する。それによって近代工業は社会のなかにおける分業につねに革命的变化を引き起こし、大量の資本と大量の労働力を一つの生産部門から他の生産部門へと移動させる。したがって大工業は、その本来の性質からして、労働の転換、機能の流動化、労働者の全面的な可動性を必然的にもなうものである。

上の引用の最初の部分で指摘されているように、人間の労働が機械に置き換えられるためには、人間の作業を細分化して分析し、機械的な動作へと転換可能な動きとして析出することが必要になる。こうした労働の細分化の組織的な研究と応用の事例としてはテーラーの「科学的管理法」が有名である。労働者の動作を細分化し、もっとも最適な動作と道具の使用をマニュアル化する手法は、現場の労働者の主体性（経験的な判断に基づく作業手順の現場での決定）を奪い、資本の効率性を徹底して労働者に強いる手法である。こうした手法が導入されると、その次には細分化された作業のなかで機械化可能な作業に機械が導入されるが、機械のテンポと手作業のテンポのずれがあるかぎり、部分的機械化は劇的な時間の効率性を達成できない。他の手作業部分を機械化しようとするインセンティブが働き、次々に機械への置き換えのための技術開発が進む。最終的には、労働者が機械の補助的な労働の位置においやられ、省力化は労働者の排除（失業）の要因となる。

こうした単純労働化は労働力の流動化をもたらす。単純労働は労働市場で容易に調達できるから、必要な時期に必要な数だけ労働市場から調達することが労働コスト最小化に寄与するという資本の利害が働かなければ食べていけないという労働者の労働の動機よりも優位にたつ。パート、アルバイトなどの短時間労働は、必要な時間だけ雇用する形態だが、こうした形態は資本の効率性にとっては好ましいかもしれないが、賃金によって生活を支える労働者にとっては生存の不安定と直結する。こうした不安定な雇用が労働市場を支配するようになると、労働者は自分一人の労働だけで家族を養うことができず、家族の構成員が労働市場に参入せざるをえなくなる。法的な規制が緩いと子どもの労働が蔓延する。

こうした傾向は、製造業の現場だけでなく、サービス業や第三次産業でも同様である。飲食業であれば、昼や夜の食事時間帯に多くの人員を配置できるような短時間労働の雇用が一般的になる。スーパーマーケットであれば、夕方の買い物時には多くのレジ係が必要だが早朝や深夜は人数を絞るだろう。これは資本の効率性にとって好ましい雇用形態だろうが、労働者にとっては短時間労働となり、それだけでは生活を維持できない。労働者は複数の仕事をかけもちするなど不安定な生活を余儀なくされる。

農村部の労働力はこうした労働市場の流動化を前提として部分的に都市<労働力>として動員されることになる。農閑期に農村から都市へ出稼ぎに行く。都市の建設現場のように建設が終われば不要となる不安定な労働の現場などで働くことになる。多くの労働者が正規雇用によって占められるような労働市場のばあい、建設現場<労働力>のような短期間労働のための<労働力>調達にとって農村部の出稼ぎ労働者は不可欠の<労働力>としての条件をもっていた。しかし、労働市場全体が流動化するようになると都市部の若年<労働力>の動員も可能になる。^{*7}

資本は投資を需要に応じて変化させる。生産過程も需要の動向で左右される。

^{*7} 日本の建設労働は戦後の高度成長の時代には農村の出稼ぎによって支えられていたが、現在ではむしろ都市部の不安定な雇用状態にある若年層や外国人の労働者に支えられている割合が高くなっている。他方で、急速に都市化、工業化が進みつつある中国では、農村部からの出稼ぎが都市の建設労働を支えている。

11.2.5 なぜ近代資本主義は工業化を出発点に据えたのか

近代資本主義は、それまでの伝統的な社会と大きく異なって「工業」を経済システムの中枢にすえた。これは人類の進歩と発展の必然的な帰結なのだろうか？必ずしもそうとはいえない。むしろ、経済の中心を農業など一次産業からシフトさせたのには資本主義に固有の理由があった。機械化と技術革新が資本に恒常的な特別剰余価値の可能性をもたらすメカニズムは既に述べたが、これに加えて以下のような事情を踏まえることが必要である。

上で述べたように、資本は効率性と結果の確定性（生産の予測可能性）が剰余価値生産に大きく影響する構造をもっている。人間の不安定で速度に限界がある労働にくらべて機械は技術開発によって速度と計画をコントロール可能な条件を備えている。しかも、近代社会は、理念として個人の自由と平等を基本的な権利として位置づけることによって、身分に束縛された伝統的な社会から個人を解放するかわりに労働市場の〈労働力〉として個人の自由意志で職業を選択できる形式的な条件を整えた。労働市場の流動化にとって個人の自由と平等は必須だが、労働の現場で労働者は資本の指揮監督に従属せざるをえず、自由と平等の理念は限定的である。資本は利潤を、労働者は生活費を取得することを目的に経済システムに組み込まれるが、両者の動機は同じではなく、むしろ利害の対立が根底にある。こうした自由と平等の限界が、労使関係の摩擦を生み出した。機械化はこのような労資関係（階級関係）がもたらす摩擦を労働者を単純労働化して流動化し排除と吸収を繰り返す労働市場のなかで否応なく資本の支配に従属するような環境に投げ込むことを可能にした。

資本主義では、機械化は省力化＝労働時間の短縮による自由時間の増加というふうには働いてこなかった。むしろ人々の労働は細分化され単純化される傾向を生み出したといえる。

他方で、農業などの第一次産業は、効率性の面でも予測可能性の面でも大きく自然環境に支配され、工業のように劇的なスピードアップが可能とは言えない。農業は食料と工業原料の供給部門として必須であるにもかかわらず、社会の基幹的産業とはみなされず、人々の職業の価値観においても劣位におかれるという差別的意識（農村や田舎を遅れた地域とみなして若年層は都市部での雇用を目指す）が農村部の所得の低さとともに再生産されるようになる。過疎とよばれる問題は、こうした近代化＝工業化がもたらす人々の産業に対する価値観と密接に関わっている。

工業化＝機械化は、労働の細分化と排除と表裏一体で進むので、工業部門が機械化されるにつれて、工業そのものは産業の規模としては巨大であっても雇用部門としては相対的に小さくなる。〈労働力〉の多くは、機械化が困難な部門に移動することになる。長期的な雇用の動向は、工業部門から非工業部門、とりわけ資本内部の管理部門、販売やサービス、情報といった部門へと移動するようになる。しかし、機械化が生産の現場から管理部門や販売部門へと波及するようになるにつれて（コンピュータ化はその影響力としては19世紀の蒸気機関に匹敵する第二の産業革命といえる）、こうした部門でも〈労働力〉は熟練の解体が進み、機械化が進み、排除されるようになる。

労働者の資質は、伝統的な工業化社会であれば工場の〈労働力〉であり、物を作る労働であったが、脱工業化社会では機械化が困難な部門、とりわけ高度な生産力を獲得した資本が直面している商品の販売に関わる部門に多くの〈労働力〉が動員されるようになる。つまり、物を相手にする労働から人を相手にする労働に労働そのものが変化しはじめる。コミュニケーションは人間の基本的な資質であるが、このコミュニケーションが〈労働力〉の重要な資質になる。他方で、工業のなかの物を作る現場は、周辺部に追いやられる（途上国や農村部に移転される）。かつて農村と都市の地理的分業が支配的であったのに対して、多くの労働力を必要としない農村部や周辺部に工場が移転し、人が集中する場所では人との接触が必要な労働が生み出される。情報は遠隔地のコミュニケーションを促すが、このことは地方や周辺部を活性化させるよりも資本の中枢が位置

し、富が集中する都市に従属する構造を強固なものとする。